

2016年10月15日(土) 通信三田会 「卒業生1万5千人達成祝賀会」 北館ホール
坂上 弘 小説家・慶應義塾大学出版会 顧問

記念講演 — 慶應通信70年の歩み — 「向学の夏」に寄せて

1. はじめに — 「向学の夏」のこと

卒業生1万5千人達成、おめでとうございます。これは何十万人の中の1万5千人なのではないでしょうか。その数字を私は自慢したいというつもりはありません。本当に価値ある数字だからです。

普通並のご苦労ではない。人間としてのご苦労とよろこびの入り混った、それを克服することで人生の目標を達成できた、真のよろこびの数字であろうと思います。尊敬をもつと同時に、私なら挫折して、同じ仲間への、尊敬の念をもったでしょう。私は、通信教育課程卒の皆様と働いていますと、大変好きです。ねばりづよいし、明るく、組織の要めになっておられる。聞いてみると、いろいろなスゴイ人がいる。

- ・経済学部を卒業した学士が、又、法学部で学ぶ。2つ卒業される方がいる。
- ・慶應の通信を卒業して、他の大学の大学院に行く方がいる。
- ・他大学の学士をとられたあと、学問の目標をさらにもって義塾にくる実社会の人々。

— さて、ここへの私の登場のキッカケとなった理由ですが、昨年の日経に書いた「向学の夏」です。日経には、夏になると一回書きます。

— 1945年8月の終戦がいかに心を支配しているかが、私の世代です。

— 1936年生まれの、平和へのよろこびを1945年に味わったこの私の世代の出発の夏、とともに、戦後のすぐ48年1月に、じつはもう一つ出発したものがあ

それが義塾の通信教育である。当時のGHQの支配下で日本の大学として社会人教育をはじめるとあって、義塾は真先に教育による復興に手をあげた。教育こそ日本の本道です。これがあつたので、日経で私は暑い中で学ぶ通信の皆さんの現代の姿を、書きました。お手元のコピーです。夏のスクーリングの学びの姿です。義塾では、この学びのことを、勉強といわない。学問といいます。

— これが吉浜さんの目にとまり、今日の講演のおすすめになった。

— そこで今日は、少しでもその当時のすごいエネルギーを廊下に展示したいくら

いですが、それができないので、「慶應通信」の第1号のコピーをお配りします。勿論、この通信教育課程が大学の正規の課程として認可されるのは1950年になると、義塾の他に、中央、日本女子大、日本大学、玉川大学と続きます。この辺のことも「慶應通信」から読めます。

2. ごらんください。あとでゆっくりお読みいただきその熱気、全国津々浦々からの志願者、北米合衆国からもきています。終戦の夏から立ち上がった義塾、それを示す慶應通信70年の第一歩がここにあります。

この「慶應通信」第1号、昭和23年（1948年）1月10日号 第1面に「福沢先生の誕生日を迎えて— 大学通信講座いよいよ開講」という見出しがでている。

— 昭和23年1月10日福沢先生の誕生記念日を期してわが慶應義塾大学通信講座はいよいよ画期的な教育民主化の第一歩を踏み出すことになった。

とありますように、戦後の廢墟（三田はひどい損害ですが雪の朝の写真をごらんください）そこからの復興に福沢先生と共に、学問による復興を歩むよどみない気持ちで進む、明治維新と同じ気概を紙面に発露しています。

この「慶應通信」の社説面に、高橋誠一郎名誉教授当時塾長代理が「開講に際して」をのせ、次のようにいう。「御承知の如く、新憲法は其の第26条に於る国民が其の能力に応じて、等しく教育を受ける権利を有することを規定している。而して、教育基本法と同時に施行された学校教育法は、期くの如き精神を取り入れ、教育をすべての国民に解放して、教育上の機会均等を実質的に保障せんことを期し、特に勤労大衆青年の就労を容易ならしめるがために、高等学校及び大学に法規上正式に夜間学校を認め、高等学校には定時制のものを認めたが、特に又、通信教育を制度化する所があった。

洵に、通信教育こそは、教育の民主化、教育の機会均等の要望に答える新しい教育方法なのである。

而して、教育の民主化、学問の普及を旨として拮据経営九十年の歴史を閲した慶應義塾は、此の機運に乗じていち速く其の陣容を整え、大学通信講座を開くことになった。今や其の準備全く成り、三学部、各三千の学徒を迎えて華々しく開講するの運びとなった。洵に慶賀に堪えぬ所である。」

この第一歩を読みながら、私は、幼い戦後感覚と、その同時期に義塾の人々が、こ

の三田で、社会のリーダーたちの国の復興への使命を、学問をスタートすることで、自分たちでやろう、福沢先生の原点においてとらえている義塾の思考のかたち、すがたに、本物だな、すごいな、と感じる。このへこたれないところがいいでしょう。この第1号を、皆様に贈る次第です。

3. 慶應通信から慶應義塾大学出版会への歩み

さて、慶應通信教育図書株式会社のスタート

1月10日発行の「慶應通信」第1号、といっしょに5月10日発行の第3号をお手元に、皆様に記念にさし上げています。もう1回のスクーリングが報じられていますね。

これをさし上げる意図は、今の時代に、通信による学問、学び直しの時代に求められている「学問のススメ」をこれからの日本の為にさらに発展させていただきたいからです。

この「慶應通信」の発行は、慶應通信教育図書株式会社です。

よくごらんください。この資料は、当時、戦後の社会復興の日本を先導して行く義塾の使命感が、福澤精神として語られている。強く伝わる。戦後の危機ということでは、明治維新以上であったからです。

そういうときに、“慶應通信”は、とても大事な使命をになう、ジャーナリズムでした。堂々とスタートしています。

ところで、よくごらんいただくと、この第3号（1948年5月10日発行）の下の広告に、2つある。

1つは、慶應通信教育図書株式会社 三田豊岡町8で、1つは、慶應出版社 三田二ノ一。1方は、われわれ学生の課外読物の福沢先生の本。1方は、教授の学術書。この慶應出版社は、大学出版社、ユニバーシティ・プレスのようなのだが、内実はどうなっていたのだろうか。

ここで、ちょっと、義塾の出版活動の歴史はどうなっていたのだろうか、という、大事なところに、脇道ですが、入ります。いやもしかすると、福沢先生が相当に力を入れたこの義塾の出版力をのばすのが、これから如何に大事か、と思うからです。小泉先生と株式会社慶應出版社のこと。

私は調べたことがあります。小泉先生の愛着、ヴィジョンにはユニバーシティ・

プレスがあった。福沢先生の出版社は、時事通信に発展しますが、なくなった出版社を義塾としてもう一度もちたいな、とこの出版社があったのに、どうして別に慶應通信をつくったのか。

私は、この慶應通信を平成 7 年、1995 年に引き受けました。

1995 年（平成 7 年）10 月のことです。石川元塾長にも「三田文学」のことでお世話になっていましたが、鳥居塾長のときです。義塾の慶應通信を再生する方針、社屋新成、マーケティングセンターの新成、と通信課程の改革発展と義塾のユニバーシティ・プレスの機能強化という 2 つに軸をおいた方針をもって、義塾は私にやるように言われた。義塾の、福沢先生以来のスタートです。じつはその時、鳥居元塾長は、何でも言ってください、ききますから、といわれた。この大きさ、おおらかさが、ありがたかった。私が真先に打ち出したのは、社名変更でした。無謀だったかも知れませんね。

そのとき、「新しい UP への期待」という座談会を高宮利行教授、池田真朗教授、谷下一夫教授でひらいて下さった。

いや、その少し前、中等部の大澤輝嘉教諭と杉本聡子教諭がお祝いに福沢先生時代の、明治 7 年の慶應義塾出版社の看板を贈ってくださった。中等部の廊下にならずに残っていたそうです。福沢先生の時代がプンプンする木版刷りです。よく見ると、「阿部泰蔵訳述・小学地理問答」や中上川彦次郎「文字の教」明治 7 年、とある。「学問のすすめ」もこの慶應出版社の大看板です。日本の UP の嚆矢は福沢先生の出版社でありましたが、この出版社は東京で一番大きな出版社になり、義塾の経営を十分に支えたので、先生は時事新報社へ発展させる。明治 5 年にはじまった日本ではじめての UP は、福沢 UP は、それが惜しくもなくなりました。出版社は其後、小泉先生がそのかたちを整え、引き継がれております。

小泉先生は、1936 年（昭和 11 年）、ハーバード大学創立三百年祝典に列席、傍ら、米国諸大学をみてこられたとき、米国人の教育を重んじ尊重する念の深いこと、大学の本務について常に期することの高いこと、学生の健康についてのほかに、「同じく在米中少しく注意を払ったのは、大学外に向っての普及の運動である。周知の如く、大学外の公衆に向って講演あるいは講義録のような刊行物をもって働きかけることがそのおもな方法となっています。（中略）塾では少し見るのがあって、この度塾外に株式会社慶應出版社なるものを起し、先ず義塾の経済学の講義を講義録よ

うの形態でそこから公表することにしました。(略)」とおっしゃっておられる。小泉先生の設立になる慶應出版社は、その目的は、いまの出版会に近いのではないかと思います。この慶應出版社は戦後小泉先生の「入門経済学」などのベストセラーを出版しましたが、昭和23年(1948年)8月、資金難で倒産します。

出版というのは、その国の文化の度合を示します。文化の血液の流れとってよいでしょう。その血液が文化の度合をきめます。人でいえば血液のながれです。発展するには、見る、聞く、話す人間の言語を、出版して行かないと、「学問」がダメになる。福沢先生の“学問と出版”を同時に力を入れる時代がふたたびきた、これが、戦後の通信教育の本当の意味、文化の流れではなかったでしょうか。この動きに向かったのが、慶應通信教育図書です。

こうして、22年(1947)11月、われらの通信教育課程の大事業を、そのスタートを成功させるために、義塾と有志が結集して慶應通信教育図書(株)が設立されます。(2つの広告が並んでいますのは、当時のこの様子をあらわしているのです。)

この初代社長に、金澤冬三郎(福沢先生門下であった加藤政之助の娘婿)が。常務取締役役に富田正文(福澤研究のわが国の雄)が当たったというのも、義塾の出版事業が、福沢先生の頃からの思想を実学として受け継ぎ脈々と石川・鳥居塾長とつながっている証といえます。義塾の歴史と時代を、教育・研究で引っばる力の根源です。

くどいようですが、この力を皆さんで、これからも義塾のために育てて行ってほしいのです。

戻りますが、このように、1947年4月1日に教育基本法と学校教育法にもとづく新学制がスタートし、5月3日に新憲法が施行された。慶應義塾は直ちに通信制の設置に入りその実務を担当する会社・慶應通信教育図書を設立、誕生。設立にあたって神崎丈二(教務担当理事)、山根勝亮(出版協会)、塩山豊藏(中井商店)、川口芳太郎(帝国印刷)によって株式会社をつくり、帝国印刷(今の図書印刷)の社内に借用して出発。

60名会社。潮田塾長のとき。47年初代社長は金澤冬三郎氏、2代目社長は1955年富田正文社長。これが創立期の姿です。今日の皆様の慶應通信のスタートです。その当時の教科書陣がすごい。

西脇順三郎、厨川文夫、後藤末雄、佐藤朔、森武之助、池田弥三郎、三雲夏生、

井筒俊彦、奥井復太郎、高橋誠一郎、野村兼太郎、折口信夫
黎明期の教授陣のすごさ。井筒先生の「ロシヤ文学」という名著もここでうまれました。

初年度入学者数 23,678 名。10 年間の平均 7,630 名。

1995 年(平成 7 年)、私が引き受けて 20 年になりました。

勿論、私が力を入れたのは、社名変更だけでなくテキストの改訂、新作です。

「レポート論文の書き方」の話もしましょう。

こうして、出版会は皆様とともに、頑張っています。

4. 私が義塾で学んだこと

4-1. 義塾・文学・福沢のいきいきした山脈

慶應義塾はどんな山脈の学塾なのだろうか。

高校時代、都立だったものですから、福沢先生の本を直接読む前に、小林秀雄の福沢論吉論なんかを読む環境でした。小林秀雄は、「学問のすゝめ」第 13 篇をとり出して、次のように解説してみせる。福沢先生はいう。人間品性の不徳を語る言葉の種類は実に沢山あるがその人心の動きに着目すれば、その内容の強弱、方向によって、間髪を容れず、徳を語る言葉に転ずる。例えば、「驕傲」は「勇敢」に、「粗野」は「率直」に。「固陋」は「着実」に、「浮簿」は「穎敏」に、という具合に切りがない。ところが、絶対に不徳を現わして、徳に転じないものが一つある。それが、「怨望」という言葉である。(略)「怨望」は自らを顧み、自ら進んで取ることがない。(繰り返します。)自発性をまるで失って生きて行く人間の働きは、「働の陰なるもの」であって、そういう人間の心事は、内には私語となってあらわれ、外には従党となって現れる他に現れようがない。怨望家の不幸は、満たされる機がない。自発性を失った心の空洞を満たすものは不平しかないも、不平を満足させるには自発性が要るからだ。(「学問のすすめ」第 13 篇)

おおよそこういうふうな、小林秀雄が福沢先生をいかに日本人の思想を改革牽引するに偉大な、平易と苦悩をもっていた実践家であったかを論じているのを知ったのですが、その後ずっと福沢先生を読むときの指針になった。つまり福沢先生は、勉強のすすめを説くなどはしていない。学問のすすめであり、その学問とは、日本人が自己の美德困窮の中にすっかり忘れていた冷静で人を愛するサイエンスである

ことを。

その後私は福沢先生のことを深く学ぶわけでもなく「三田文学」の先輩たちの膝下で育つことになります。学生時代から小説の方へすすんだ。

内村直也、北原武夫、佐藤朔、戸板康二、丸岡明、村野四郎、山本健吉という7人の侍といわれていた大先輩だった。これらの人々に、後輩の私たちに最初から傲岸排他は露ほどもなく、「文学は人を拒まない」という協和的精神がみなぎっていた。そこには眞実、「怨望」というものが一切はたらくことはなかった。当時学生の私自身はまだ「社中」という言葉すら知らなかったが、三田文学の編集の下働きをさせてもらいながら、「三田の文人氣質」を吸収していました。

こうして「三田」「義塾」という環境は、私には、文学そのものの自主、自由を教えてくれたが、それは、「スクーリング」に一番、学ぶ姿が似ていた。自主的で自由で、生き生きして、そこには一切怨望というものが無い。

校舎の遠くで子供部屋の声がきこえる。あの子供たちはいまどうしているだろうか。あの皆様は、きっと塾生になって今の時代を担っているだろう。

私は、三田の文人に、その怨望のない気質に育てられたことを、生涯で最も多とし、この怨望のない気質こそ、二足の草鞋をはいてきた私は、世界で通用することを知っている。二足の草鞋は、日本ではよくないイメージだが、世界では、二つの帽子にたとえている。

「学問のススメ」の本質は、型にはまらないということ。三田の文人は型にはまらない革新的な人が多い。二足、三足の草鞋、二つ、三つの帽子をかぶることです。水上、久保田、佐藤、小泉。西脇、井筒、折口、滝口。この方たちが芸術家ではあるが、義塾の福沢精神のあらわれであることは、眞実です。この中で一番好きな人は、水上瀧太郎（さきほど出した阿部泰蔵の息子さん）なのですが……。

おわりに

70年を迎える通信教育部が、在學生、教員、職員、そして卒業生である通信三田会の塾員の皆さん、社中一致協力によって、益々の発展をとげて行くことを切に希望し、私も、皆さんと一緒に、芸術家ですが、これからも塾員の一人として、その発展に貢献させていただきたい、と思っております。

以上